



昭和44年(1969年)

4月号(No. 286)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

会員通信

やさしい山・低い山
はじめての山・思い出の山……………1

報告

ネパールヒマラヤ
新登山規則書……………1
Application Form to be
Filled by the Leader of
the Expedition……………2

図書紹介

日本の山岳(松崎中正)……………4

図書室便り

……………5

会務報告

三月理事評議員会……………5
三月臨時理事評議員会……………6
東九州支部総会報告……………4

その他

本会の栄光……………6
谷川岳登山のための
身分証明書の書替え……………6
STEYR GRÜSST
DEN ALPENVERINS
VERSAMMLUNG……………3

お知らせ

新登山規則書発行さる

昨年八月十九日、ネパール政府は三十八座(会報山二八一号)の解禁を発表したが、その後新規則の作成を進めていたところ、この度その詳細が本会に届いた。

これによると、登山隊の前の規制にはふれていないので、会員でネパールヒマラヤに登山計画を持つ方は至急、次の書類を揃え、所属する各都道府県山岳連盟を通じて、日本山岳協会に提出して下さい。

- ① 英文アプリケーション、及びコピー各一通(フォームは別掲参照)

- ② 日本山岳協会の推薦状下付願

二通

- ③ 計画書 二十部

- ④ 誓約書 一部(様式による)

これらは、日山協会の審査を経た後、この推薦状を添付して外務省に提出する。

この規則書にも明記されているが、日山協会のレコメンデーションと、外務省の認可の手紙を添付してアプリケーションを提出するようになっていて、この一つでも欠けると、登山申請は行えないので、適切に行うようにして下さい。尚、全文の詳細についてはお問い合わせは、大塚理事まで。

▼会員総会

昭和四十三年年度通常会員総会は、四月十九日午後三時より本会ルームに於て開催されます。会員各位のご参集をお願いする次第です。

やさしい山・低い山
はじめての山・思い出の山

日 高 信 六 郎

昨年のはじめから急に世俗の用事がふえて山に出かける余裕がなくなり、六月のウェストン祭にはと思ったが直前に差支えが出来て珍らしい好晴の上高地を楽しむ機会を取逃した。

三月中旬から会議のためジュネーヴで一週間を過ごした。最後の一日はパリから合流したむすこと近くのサン・セルダの山村に出かけ、ジュネーの低い峠から遙かにモン・ブランからダン・デュー・ミディにつらなる雪山を眺め、スキーのパトロールや遭難救助を受持つという山好きの運転手と山の話に興じた。その後ドイツで過した一週間の旅のことがシュテライントワイトの親戚に会ったことは「山」二七八号に書いた。往復とも北まわりで、おなじみのマッキンレーの双峰が送り迎えてくれた。

その後チヨイチヨイ出かけたのはやさしい山や低い山ばかりで、ひとに誘

われたりついでに登ったものだが、その多くは初めてであり、むかしの思い出が残る山もあって、親しい山仲間と談笑したりひとりで歩いたり、大いに楽しんだ。

七月中旬立山・麓の文部省登山研修所の講習会に出て、各地から集った元気な山友と半日を過ごしたのち、果親光課のお世話になって有峯湖畔に一泊し、折立の薬師岳登山口まで行き、そこから新に開けた真川沿いの車道(有料道路だと云ふ)を下って現在の終点である常願寺川合流点のところ立山温泉の手前まで往復した。岩井谷とスゴ谷の落ち口を渡るとき谷の奥に雪を装う薬師のあたりを仰ぐ。大正のはじめ立山から槍へ縦走したとき、太郎兵衛平に泊った人夫を真川谷の側面(がわし)のところにやって米を分けてもらったことを思い出した。大した変わり方である。

有峰湖を半周してキャンプ場や展望台を見た。派手に俗化しないよう留意している県や電力会社のやり方は好感がもてる。大和峠を越え高原川を下り神通川に沿って富山に降りついたが未だ日が高かった。道がよくなり交通が便利になったのには驚かれる。

八月はじめ裏磐梯の国立公園大会に列した機会に大ぜいの参加者に交って磐梯山に登った。山を吹飛ばして田畑を埋め川をせき止めて湖水を造った大変貌のあととは未だ何となく落ちつかぬ景観を呈する。物すごい爆裂火口の奥にあった噴火湯のあたりは戦後の異変で登路もなくなつたらしい。中の湯で一休みして登ったが弘法清水で時間切れになり、猪苗代に下った。

同月中旬には加賀白山に出かけた。同行は自然公園審議会で同役だった見玉政介老、内務厚生行政のベテランで健脚無比の山好き、日本中を回っている山に登り今でも登りつづけている、世に知られない大立山家である。むかし知事をつとめた石川県の山歩きをい出したのはもちろん同氏である。金沢から白峯村の市の瀬を経て別当出合いのかみ手中飯場まで車を飛ばし、砂防新道をとって室堂に泊る。夜は管理人

の木下さんのもてなしで牛飲馬食、客は白山比咩神社の称宜と白峯村の棟梁。夜半ごろから到着する登山者が見続いた晩にはお前峰の頂上で御来光を拝み祠前で祝詞を聞き神酒をいただいた。こんな方式が今も行われているのは珍らしくうれしい。見玉老は最年長者として万才の音頭をとりお神酒をいただいた。昨日の雨が晴れて遠近の山々が見わたされる。北アルプスを登って西を見るとときまつてこの山が雪を被り根をはって現われる、おなじみの山であるが登るのははじめて。下りは別山につらなる稜線を伝う新道をとり、大白川の人造湖を左に見下ろし竜ヶ馬場をぬけて市の瀬に戻り、中宮温泉にまわって中食した。この近くで猿の餌付けに成功したというので寄りみちをした。近頃は日本中いたる所で猿は人間の手から餌を貰う癖をつけられている。人間の立入り方を禁じて本物の天然猿を谷越しにでも観察するところをどこに残してほしい気がする。

山中の開発は大いに進んで、この辺から蛇谷の奥に向って林道の工事が進んでいる。数年後には三方岩山の辺で峰を越え庄川の谷まで車が通れる様になる。

なるう。手取川にも多目的ダムが出来るといふ。そうになると白峯村全戸数の半分近い桑島部落の二百五十戸が水没するので、さなきだに人口離散に苦しむ白峯の村長さんの悩みは深い。

九月初旬仙石原での集会が終了した後一人で金時山に登った。大学生のころ登ってから約五十年振り。その時は金時神社の裏から直登したが、今度は矢倉沢峠を通った。ここには茶屋が出来て頂上のは二軒になり金時娘は子持ちのオカミさんに生長した。茶屋のオカミさんと仙石原の昔話に興じた。会員松本善二さんが一月に登られた話を聞き署名を見る。老いて益々盛岡氏に頭を下げた。下りは足柄峠に見合った。傾く陽をうけた茅原ごしに見かえる金時山は印象的だった。地蔵堂で終バスをつかまえて小田原に出た。

九月末には栗駒山園定公園制定祝賀式に招かれて出かけた。平泉で新装の金色堂を訪ね、一の関から車で山上の須川温泉まで往復したわけだが、余興の隣接四果の民謡は面白かった。民謡と山菜は紅葉と共に東北が優れているというのは定評だろう。近くの朱池と泥炭層を訪ね旅館裏手の弘法岩に登って近くの紅葉と遠くの鳥海山を眺めた。途中の趣深い民家の茅葺きがほとんど原色の鉄板に代り行くのは惜しい。

十月中旬所用で松江に行った序で石見太田経由で三瓶(志学)温泉に泊り三瓶山に登った。定めの松でバスを降り寝ころがる放牧の牛やかすりの野良着の娘をのせた馬を横目に、のんびりした裾野から男三瓶に登るまではゆっくり景色を楽しんだが、頂上につく頃から吹降りになって弁当もゆっくり食べぬ始末。女三瓶をまわって東の原スキー場に出るまで霧にまかれ雨に叩かれ一人で歩いた。今夏の国立公園大会の準備に道普請や裾野の設営などが

行われていた。三瓶は小規模だがゆとりしたい山である。

十一月九日は恒例のもみじ会で十里木に出かけた。大正十三年ころ会員故山口成(一君)など三人づれで富士宮(當時は大宮)から御殿場まで歩いたときこの辺は寂寥として数軒のあばら屋しかなかったのが、近年急に「開発」が進んで別荘団地が出来、宿屋が出来て賑かになり、車の往来もはげしく、すっかり様相が変わってしまった。篠づく雨の下愛麗荘ガレージでのバーベキューそれに続く生敷での飲談では十里木の語源や考証やら今昔の山話しやまことに楽しかった。翌日はウソのような快晴。越前岳に登り尾根を東北に伝って須山に下り御殿場に出るまで、上半身真白な富士は惜し気もなく全身を現わして終日われわれの眼を楽しませてくれた。

これで今年の山行は打ちとめかと思ったところ、堺の会員仲西伸一郎君から誘いがかかって、同君が世話している近畿山行舎の一行に加わって石鎚山に出かけることになった。四十人ばかりでバスに乗り十一月連休の前夜大阪発乗り通して四国に渡り早朝山下の西の川着出来たてのロープウェイで成就社につき軽食の後新雪を踏んで頂上まで往復し、翌日同じ路を通過して五十時間ぶりに帰阪した。便利になったものと驚くやら呆れるやら。明治の末年中学生のころ同室の故中村研一(のち芸術院会員)同塚二(一水会々員)兄弟と登ったときは西条から西の川までの長いみちを一日がかりで歩いたが、それは川に沿った高捲きの細道であった。途中から伴れなくなった郵便配達夫は赤い「干印」をつけた饅頭笠を頭に被ってはいたが、禪一本の丸裸で素足に草鞋、郵装をくくりつけた天秤棒を担いだ姿は広重五十三次の登場人物そっくりだった。

APPLICATION FORM TO BE FILLED BY THE LEADER OF THE EXPEDITION

1. Name of the expedition :-
2. Country of Origin :-
3. Sponsored by :-
4. Financed by :-
5. Members of expeditions (Biographical sketch and Photo of each of the members to be attached)
6. Object of expedition :-
7. Name and Height of the peak :-
8. "Index map of the concerned area to be attached as far as possible" is to be preferred :-
9. Duration of the expedition (period between the arrival in, and departure from Kathmandu)
10. Route the expedition follows in Nepal
11. Number of porters to be employed
12. Number of Siardar and Sherpas
13. List of the equipment to be attached
14. Estimated total cost of the expedition
15. What amount of foreign currency is to be brought in the Kingdom of Nepal
16. Estimated expenditure inside Nepal
17. Other particulars, if necessary :

To,
Ministry of Foreign Affairs,
His Majesty's Government of Nepal,
Kathmandu,
Nepal.

Sir,

Being desirous to climb the above Himalayan peak, we have submitted the application in accordance with the "Rules Governing Mountaineering Expedition 1969". Therefore, I hereby request His Majesty's Government to grant the necessary permission according to that rules for carrying out the expedition. I promise to fulfil and make others fulfil our obligations by observing the rules relating to the same. I hereby agree that in case of failure to fulfil our obligations on my part or on the part of other members I should be liable to any charges under the said rules and prevailing law.

Yours Faithfully,

STEYR GRÜSST DEN ALPENVEREINS- VERSAMMLUNG

吉沢 一郎

ヒンズー・クシュの記録を読むとよく、Steirische H. K. Exp. という字が出てくるが、これはÖAVのシュタイア支部派遣という意味である。

小豚の丸焼きの一部を御馳走になった翌朝、近頃僻になった早起きで私はまだ人気がない一階へ下りてから外へ出た。小雨が降っていたが静かな傾斜した草の斜面に、大鎌をもったオジさんがもう草を刈っていた。私の姿を見て、ゼール・フリューンという。

私は上品な色をした小さな花のついた草を何本か摘みあげてポケットのノートの間に挟んだ。ここはどこだったかと考えてみると、東京とは地球の反対側であるばかりでなく、小さな地図なら絶対に出ていない、ヨーロッパの田舎のその又片隅で、極めて謙虚に寄

本屋の店頭に掲げられた歓迎の表示



り集って出来ている町のその又郊外なのである。私はここに立つて初めて、憶平、遙くも来たるものかなという、感慨の湧いてくるのを感じない訳にはいかなかった。

同宿の人達と朝食を食べているところへ、ギンター・ハウザーが迎えに来た。支払いは一三九シリング（一四四円）、約二〇〇円である。これは勿論私が払った。

車の中でハウザーが又話す。ドイツ人は一般にオーストラリア人に対し、彼らは人は至極いい組織力が不足している。そういう点ではイタリアもスペインも同じだ、と言っているといっただ。オーストラリア山岳会の総会（Generalversammlung des Österreichischen Alpenvereins）が九時から始まるのだが、私はこれからそれが如何にテリブルなものであるかをあな

たに見せようとしているのです、とも加えていた。

会場へつくともう大部人は集まっていたが、静かに皆が席についたのは午前九時一五分。壇上のラッパ手は朗々とラッパを吹きならす。壇上に並んで腰かけているのは殆んどしかつめらしい顔をした連中ばかりである。

幹事が最初に來賓の紹介をする。それから昨年度の物故者の報告。これに対して参加者は起立して聞いているのである。文部大臣と立派な飾りのついた軍服を着た將軍の挨拶に続いて私が一〇時五〇分に全員に紹介された。皆どうやら拍手をしてくれた。それからドイツ山岳会の第二副会長、自然の友（Naturfreund）の会の会長、オーストラリア山岳会の会長……が交る交る壇上へ上って大演説をぶった。それから最後に、エーリッヒ・バーニスが一着若いところ

を代表してキビキビとした挨拶をした。

会計や事業の報告があったから総てが終ったのは正午過ぎていたろうか。それから総会事務局（Besuchsbüro）としてあった（のあるSteirische Alpenvereins）の反対側に準備された写真の展示場に行く。世界中の山の写真があったことは言うまでもない。日本山岳会でも年次晩餐会の時

左から エーリッヒ・バーニス、筆者、マチアス、レビッチ、不明



には「一本展」



総会事務局の女性

ばかりでなく、（準備をする人々には気の毒だが）こういう催しもたまにはいいのではないか。

会が終わってからG・ハウザーが、マチアス・レビッチとエーリッヒ・バーニスを紹介してくれた。前者はカール・ムールのパツラやアンドレスのセロ・ガヤン、後者はアルプスの氷壁家で、パミールにも行っている。いずれもヨーロッパ中に名の響いている山男である。

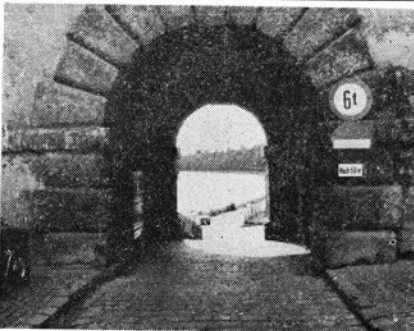
昼食は「間の橋」（Zwischenbrücke, Schüttalの河の橋）の傍らにあるHotel Münchmayrで行なわれた。前二者とハウザーが私のそばに腰かけた。私が六五歳だとレビッチにうと五五歳の間違いだらうと信用してくれなかった。自分は英語が下手だから勘弁してもらいたい、ドイツ語を早く覚えたいなら若い女性とつき合いなさいと助言した。あとでこのことをハウザーに話したら、それならドイツのゲイシャがよいという。ゲイシャは有名なんだと思う。それからドルフ・ローターにも紹介された。同じ名の先代は死んでいるので彼は二世である。ミニツクの山の名の出版社として世界中に聞えている名前である。

何処でもそうだが、山岳会の総会には若い人は余り顔を出さない。会費が比較的高いこと、何日にも渡ること、そのために休むくらいなら山へ行つた方がいいとかと言ったような理由からである。

ホテルの支配人が私に、日本人が会に来てました、というのでフロントへ出てみたら、中川貿易という会社の、宮崎茂という青年であった。

これはいよいよシュタイアをあとにし、再びハウザーの車に乗せられて往路をその保ミニツクに引返した。出発したのは二時半、それからアウトバインを走り丁度三時間でミニツクが見え出し、一〇分市内、ノロノロ運動でDAVの事務所に辿りつき、荷物を纏めて駅へ向う。これも思うように走れない。

中央駅の近くへ来ると今度は駐車するところがない。グルグル廻ってやっとおこられるかも知れないところまでバック。だが六時五分はもう出でしまっていたので次の六時三〇分にする。切符を買って列車の方へ行く、ハウザーは私の重い荷を下げて来てくれた。日本へ帰ったら、鈴木と竹田によるしくと言いつながら手を振り振り、又顔を何度も向けながら改札口（こんなものはなかった）の方へ消えていった。



シュタイアの一角とエンス河



図書紹介

毎日グラフ別冊

日本の山岳

松崎 中正

三八、三九ページ見開きの写真が圧巻である。「薬師岳一九二六メートル重量感で迫ってくる 谷に残る雪溪の白さ ハイ松のみどり 地肌の茶 気品のあるコントラスト」と見事な説明のついでにこの写真は薬師にしてはおかしい。仲よく並ぶ残雪のカルはちょっと薬師のような感じを与えるが、よく見ると、何とこれは東側から見た立山ではないか！ 並ぶカルは浄土、竜王、鬼岳などの間にあるものだ。おまけにこの写真、だいたい右に傾けて撮っているのだから念が入っている。

三五ページの常念と蝶の説明は左右が逆で、「頂上は平坦地」の蝶ヶ岳は写真の左端だ。四八ページの空木と南駒も同様で、左右反対。この写真は西面から撮られたものだ。

六二、六三ページに雄阿寒と雌阿寒とあるが、ここには雄阿寒は写っていない。形は似ているが、これは阿寒富士である。

六四ページのは二枚ともいけない。「茶褐色の山肌が大沼と空に映え……」と書いてあれば、誰でも手前の水面は大沼だと思う。しかし手前は大沼では

なく内浦湾の海、これは北西からの駒ヶ岳。もう一枚の有珠岳の写真には、「……後ろに昭和山 中ノ島 遠景は羊蹄山」とあるが、ここには昭和山なんか写っていない。それはすつと右の方にあるはずだ。

七六、七七ページの見開きは霧島山だ。そうだが、どうも私はわからない。九八、九九ページの浅間、「……右手の牙山が……」とあるが、これは北東から見た浅間だから浅間の南西にある牙山は見えないはず。牙山と説明のあるのは誰の目にも明らかな黒斑山だ。

山ではないが、一四八ページのエーデルワイス・クラブの方の写真も順序は正しくない。

細かくはほかにいろいろと注文をつけたところはあがあるが、本誌の主要な内容である写真についてはだいたいこんなところである。

次に、「南アルプスに挑む クルマで山に登ろう」というような記事があるが、大井川を二軒小屋あたりまで溯って山へ登った気持になれるのだった。仕合せだ。六八ページの月山や七二ページの岩木山に見事に写っている車道を走れば、一応山に登ったことになるのと思う。話はそれるが、岩木山のこの車道、緑の山腹に規則正しい蛇行をくり返すこの痛ましい白い道（写真に写っている部分だけでもカーブは四〇もある。これは全体のごく一部であらう。）は静かなみちのくの果ての山にすずで食欲な観光客の触手のびてきたことを示すもので、何とも悲しいことだ。

とにかくこの本は「図書紹介」の欄に出すほど立派なものではないのであるが、あえてこのようにあげるのは内容の正確さという点において少なからず問題があるからである。「毎日グラフ別冊」となれば、全国

に相当な部数が売られていることだろう。いくら大衆向けのグラフ雑誌だと言っても、いかげんな内容であってよいはずがない。むしろ沢山売れるものだからこそ正確なものであってほしいのだ。今日のグラフ雑誌とはみんなこんなものなのであろうか。

寄稿者にはJACの会員が何人も名を連ねていることだし、毎日新聞社はマナスを熱心に後援してくれたりして、山には理解のあるところだと思っただけに、こんないいかげんなものを出すとは何とも残念なことである。

さすがに新聞社らしくこの冬の銀岳の写真をもっと取り入れて、軽薄な登山を戒めてくれているのは有難いが、ご当人のこの本みずから軽々しいところをさらけ出しているとは皮肉だ。

だいたい文句を並べてしまっただが、悪いところばかりだというわけではない。飛行機から撮った山なみの写真には私たちが山の好きなのは誰だって夢中になるし、楽しくなるものだ。航空写真というふだんとは違った角度からの写真は興味深い。

記事にもよいものがある。加藤泰宏の「山なみ」は短い実在に味わい深いし、上田竹三「8ミリ映画の先覚者たち」は珍しい。菅沼達太郎「山のモードー〇〇年史」はグラフ誌ならではの記事だし、松田雄一「日本の山札」はいいところをついている。

昭和四四年三月一日毎日新聞社発行 二一×二八センチ 一七〇ページ (うちカラー三六ページ) 三五〇円 (うちカラー三六ページ)

東九州支部総会報告

JAC東九州支部の主催により、去る二月八日午後一時半から五時まで、大分文化会館第一会議室に於いて、国際山岳連盟総会に出席してこのほど帰

国された吉沢一郎副会長を本部より招いてスライドの映写と講演の会を催した。

会場には支部会員の外、多数が出席して盛会の内に終えることができた。尚当日併せて支部の総会を開催した。以下その報告とする。

昭和四三年度JAC東九州支部総会報告

○一般報告
昭和四三年十一月三〇日 久住町 工藤元平氏死去

○会計報告
(昭和四三年度JAC東九州支部収支決算報告書) 別紙

○昭和四四年度事業計画
十一月頃、故工藤元平氏の追悼登山を行う。久住山。

○役員改選について
前年度役員留任(次の通り)。

○その他
(1) 新年度会費の値上げについて
去る二月 日付本部連絡によると、会費二五〇円(一六〇〇円)となる模様である。従って支部としては決定通知を待った上で徴収する。

尚支部会費については本部の値上げがあれば五〇〇円(三〇〇円)とする。

(2) 本部に対する希望意見
※支部役員

支部長 野口 秋人
副支部長 松江 喜盛
常任委員 西 諒
委員 松尾 健
大谷 優
梅木 秀徳
姫野 和記
三谷 忠一

監査 三谷 忠一

俳句 水田健之輔

礎下り雲に跪く実朝忌
註一鎌倉にて

目はうるみ愛の性うけ仏生会
釘治作自像うるみ愛の性
註一芸春秋社にて佐藤釘治画伯の
個展を見る

昭和43年度日本山岳会東九州支部収支決算書(案)

(昭和44年2月5日現在)

収入の部			支出の部			
項目	金額	備考	項目	金額	備考	
前年度繰越	15,511	円 名	会場費	1,280	大分文化会館	
本部還元金	1,700	100×17	演説費	10,000	講師旅費	
支部会費	5,100	300円×17名=5,100円	通信費	431	ハガキその他	
その他	282	預金利息	事務費	110	原紙他	
計	22,593		計	12,991	工藤元平氏香典として	

残額 9,602円昭和44年度へ繰越しとなる。



三月理事・評議員会

○日時 三月六日一九時

○場所 本会々議室

○出席 三田会長、吉沢、深田両副会長、理事・藤井、山崎、大塚、飯野、丹部、宮下、広谷、芳野、長尾、小方中島、小倉、浜野、野上、評議員・佐藤(久)、望月、石原、沼倉、津田、高山、監事・堀田

議題

一 エベレスト登山の経過の件

エベレスト登山の件でネパール政府と交渉を終え二月二十五日帰国した松方三郎氏を囲んで三月一日三田会長、両副会長、植・日高名誉会員ら十五名が本会々室でその報告を聞いた。概要は次の通り。

二月十一日、カトマンズ入りしたが、折からデモクラシー・デーやアフガン王の公式訪問、休日などが重なり、十九日にネ政府担当官シトル次官補と会うことができた。本会の一九六三年のエベレスト登山のアプリーションは受けたこと、登山料の半額を受領していることが確認された。新しい登山規則ができたら日本大使館を通じて発表するからそれに従って申請を行う。本会のエベレスト登山の許可については心配しないでもよいということであり、期日は不明だが見通しは明るいものであった。

なおカトマンズ滞在中、吉良大使はもちろんのこと、ロニル西ドイツ大使にはアンナブルナ登山の特別許可について、またピシヨップ(米・ニ隊員)、

ロバーツ、シェナイターなどのヒマラヤ通に会いそれぞれの意見を聞いた。またネ政府の審議委員のグルン氏に会い有益な情報を得た。概してネパールではエベレスト登山に対する関心は低く、のん気であり規則を出しても全部は許可せず何らかの制限をするのではない。またこれからの登山隊はネパールにプラスするサイエンスを加えることを考慮する必要があるだろうなどであった。

ネパール政府は今回特例として西独のアンナブルナ隊、英国のカンジョバ・ヒマール、日本のスキー探検隊の三つの許可を出したが、特に日本のスキー隊は一九七〇年ブレ・モンスーンの許可を貰っている。これは本会の計画と時期と場所が競合するが、この点について種々意見の交換があったが、本会としては正統的な登山として許可を待ち並行して準備を進める。

またスキー隊のプラン、許可内容などについては別に高橋氏から詳細を聴くことにした。

「スキー探検隊のプランについて高橋氏の説明の概要」

三月五日本会々室にて両副会長、小原、辰沼、松田、藤井、山崎、大塚

などで事情を聞いた。

許可の期日(イ)一九六九年秋、偵察と十六mカラフィルム撮影、ネパール政府の観光用

(ロ)一九七〇年春。スキー滑降とその撮影。これに対するロイヤリティの一部は支払い済み。

(ハ)地域エベレスト山脈、クンブー氷河からサウスコルに至り、ローツ・エ・フニスをスキー滑降する。

(ニ)隊員登山経験の有する日本人サポーター隊員二〇名。同じくキャメラマン。シニルバにすでに予約済みで、ヒマラヤン・ソサイエティからOKの返事があった。

(ホ)資金未定であるが、コマージヤリズムの紐つきにならぬよう注意している。

(ヘ)準備スキー滑降の目安についてはこの秋の偵察の結果と見合せて研究中。高所生理などの点について専門委員会をつくり研究していく。

五月にはネパールを編成し八月には荷物を出し、秋にアイス・フォールなど氷河の状態を偵察に高橋氏、三浦雄一郎氏など出席する。

大要は以上の通りであり質疑応答があったが本会のエベレストの計画は一九六三年以来のもので、会員としてこれを承知の上で行った理由については折にふれて役員に個人的に話をしていた、ネ政府の要請でダウラギリからエベレストに変更せざるを得なかったなどの説明があった。また三浦氏が巷間ブラスキーヤーとして著名であり、ブラスキーヤーを起用したことについてブラスキーヤーの立場の点については三浦氏はブラスキーヤーという観点と、三浦氏がまずれば代理を起用する用意があることも述べられ、本会のエベレストの許可が下りた場合には会員として大いに協力し相互に共同研究、情報の提供も行いたいと希望が述べられた。

以上経過が述べられたが、同時期、同じ場所における目的、内容の異なるメジャー・エクスペディションが二隊出ることは現実問題として不可能である点が付言された。

この件に関して出席者から種々活発な意見が出されたが、要約すると本会はその目的とする登山の本筋からエベレスト登山の実施を押し進めるべきで直ちにエベレスト委員会を再開すべきであるとし、全員異議なくこれに賛成、前委員長は植有恒氏を委員長に推挙、折から上京中の植氏に会長、両副会長、大塚常務理事で了解を求めに行くと

にしたが、植氏に賛同を得られなかった場合には、植氏から推挙してもらうことに一同賛成した。(残念ながら植氏からは種々の都合で賛意を得られず、植氏のご意見もあって三田会長がこれを兼任することになった。)

追記

高橋氏の許可には次のような条件が附加されていたという。

- ①政府の定めた所定のロイヤリティを支払うこと。
- ②政府の指名するリエゾンを備うこと。
- ③シニルバはヒマラヤン・ソサイエティから備うこと。
- ④撮影したフィルムのコピーを(一部)政府に寄附すること。
- ⑤如何なる頂上にも登らないこと。

二、会員総会の件(飯野)

定例の会員総会の期日については、四月十九日(土)午後三時から本会々室にて行うことの了解を得た。

三、その他

①学生部登山隊名義使用の件(宮下) 本会学生部所属の四名からなる混合編成でインド登山計画が立案されたがこれについて日本山岳会学生部なる名義使用許可の提案があったが、宮下担当理事からも推せんと言葉があり、従来通り事故の場合など本会とは関係なく一切の責任は自分でとるという念書を出すことに承認された。

②臨時理事・評議員会開催の件 三月十八日(火)午後七時から本会々室にて開催する。(これは三月二十五日に変更された。)



新刊図書受入報告(昭44・2)

あかね書房寄贈

(1)第2次RCC編「海外登山と世界の山」(現代アルピニズム講座 別巻)昭44・2

(2)松本張治氏寄贈

(1)松本張治著「登山論」昭44・2

(2)西村謙二著「図解 写真測量」昭44・1 山海堂刊

定期刊行物受入報告(昭44・2)

(1)「アルプ」No. 132 '69-2

(2)「岳人」No. 260 '69-3

(3)「HIKER」No. 161 '69-3

(4)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(5)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(6)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(7)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(8)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(9)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(10)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(11)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(12)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(13)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(14)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(15)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(16)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(17)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(18)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(19)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(20)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(21)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(22)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(23)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(24)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(25)「山と溪谷」No. 366 '69-3

(26)「山と溪谷」No. 366 '69-3



vol. 11, No. 37, 1967~68.

5. Deutscher Alpenverein, 20. Jahrg. No. 6, Nov. 1968.

6. Mountain Club of South Africa. Journal, No. 70, 1967.

7. Mountaineering, vol. 5, No. 4, Autumn, 1968.

8. Verkehrtbuch, 38. Augs. Winter 1968/69.

なお、この度左記の参考図書を用意しましたので、閲覧の際は充分ご活用ください。

(1) 貝塚茂樹等編『角川 漢和辞典』昭和44・1

(2) 荒川惣兵衛著『角川 外来語辞典』昭和44・1

図書委員会報告(2・18)

川上、岩淵、野上、雁部、細川

(1) 図書整理の改善点

本のケース・カバーは長期保存のためなるべく残すようにし、ラベルは本の背のみに貼り、その面をむけて配架する。製本は漸時はじめる。

(2) 次期予算 行事について

今年度は予算が一〇万円に対し、支出がすでに予算をオーバーしている。必要な資料が高価だったためになかなか手に入らないことがあるので、来年度は資料購入費の増加を望む。行事については、定例の『この一本展』『図書交換即売会』はもちろんであるが、その他に『山岳図書語る夕べ』などの名称で、山岳図書に造詣の深い方々を囲んで、座談会を開いたらどうか。これは、山岳図書に対する興味、知識を深め、また図書を媒体として会員同志の親交を深めることでもあり大変有意義なことだと思ふ。

会費納入についてお願い

四十三年度会費未納の方は至急お納め下さい。会費によって運営されている日本山岳会です。

ルーム日誌(44・2)

4日(火) 海外連絡委員会

5日(水) 農大山岳会

6日(木) 定例理事評議員会

10日(月) 学生部委員会

12日(水) 明大山岳部

18日(火) 図書委員会

19日(水) 第二四九回小集会(東北の山の話)

20日(木) 常務理事会

二月中来室者 二九三名

お知らせ

▼「谷川岳登山のための身分証明書」の書替え

都岳連発行の標記、身分証明書の書替えを行いますので、希望の方は、写真一枚、五十円添えて本会事務局まで提出して下さい。

尚新入会員で新たに希望する方はその旨申し出て下さい。(広谷)

本会の郵便整理番号は

101です。

「山岳」第六十三年内容

W・ウェストン「日本水河遺跡論」と明治十年代前半の水河不存在論その他

ロシニ・ゴル一九六七年 岡山 俊雄

ヒリシヤンカ・グランデ一九六七年 田中 元

マウント・コウベ一九六七年 大野 光彦

サンタ・クルスノルテ一九六七年 横地 康生

マッキンリー中央麓一九六七年 佐々木孝雄

遺稿

山岳会初期の人々 中村清太郎

私の登山 松本 善二

ヤジエン峰登頂(一九六七年) 増永 迪男

ゴレン・ゴル源流を探る 宮森 常雄

ヒンズー・ラジ一九六七年 海老原道夫

ティリチ・ミール一九六七年 高島 一芳

エルブルズ山脈での合宿をふりかえって 浜野 吉生

サンタ・マルタ山群紀行 山本 良三

ワイナ・ボトシ峰登頂 関田美智子

ヘス峰登頂 中村 純二

小川登喜男君を想う 成瀬 岩雄

追悼

中村清太郎、神山 勉、伏見謙次郎、三森幾二郎、小村正尚、小里頼忠、図書紹介、会務報告、英文梗概、海外登山年表 松田雄一編 約三〇〇ページ

中には刊行できる見込みですので、ご了承願います。(中島)

本会の光栄

山の秩父宮妃殿下本会にお立寄り

去る三月一日、秩父宮妃殿下ご臨席のもとに第五回秩父宮記念学術賞授賞式が、東京銀行協会の銀行クラブで午前十一時から挙行されたが、本会からも、武田、植、日高、松方の各名譽会員、三田会長、両副会長ら関係者十三名が出席し、盛会裡に終了したが、閉会後妃殿下は、本会員の招きに応じて、お気軽に本会にお立寄りになられ、植、松方さんのご案内で図書室、談話室、会議室など、ご覧になって、横さんが撮られた若き日の殿下の写真では感慨深げなお話しを聞かれ、まことに楽しげなお時間をお過ごしになられたようであった。まさに、本会ルームの光栄の一瞬間であり、会の歴史の一頁を飾るものでありました。

なお、今回「富士山における山岳気象の観測研究」で授賞された、藤村郁雄氏も、横さんのご案内で同道された。(大塚)

三月臨時理事・評議員会

○日時 三月二十五日一九時

○場所 本会々議室

○出席 三田会長、吉沢・深田両副会長、理事一宮下、小方、野上、山崎、大塚、小倉、広谷、丹部、中島、飯野、長尾、芳野、評議員一佐藤(久)、石原、牧野、沼倉

一、昭和四十四年度事業計画案及び予算案について、前記二案件について、事業計画案を大塚理事、予算案を飯野理事より常務

理事会で作製したものの説明があった。この原案を総会にはかることを了承した。

二、エベレスト登山の件——大塚

前エベレスト委員会解散もあり、常務理事会で次の通り原案を作った。委員長——三田会長。委員には加藤（泰）、小原、辰沼、大塚、松田とし、エベレスト計画の進展と共に委員を補充していく。原案を了承。

三、四十四年度役員について

常務理事会より推せんされた候補者を原案通り了承。総会にはかることになった。

四、ルーム基金について——飯野

三月理事・評議員会で出席役員から半強制的に千円ずつ寄附してもらい、募金総額は八百万四千円となり目標額に達した。一応、募金委員会は解散するが、正式な決算報告は「山」の紙上でしたい。

五、国際アルピニスト集会の件

七月七日〜二十六日までシャモニーで行われる。会員に各自通知することを了解。

六、信濃支部マッキンレー登山の件——大塚

支部の事業計画としてマッキンレー登山を行いたいとの通知があった。正式な計画書が到着次第常務理事会で検討する。

七、シエラクラブ訪日の件——丹部

二百人くらいのメンバーが来日すると予想されるので、その受け入れに協力して欲しい旨の要望があった。

八、山岳六三年号について——中島

既に再校が終り、四月中には出版できるのではないかと考えている。定価は二千二百円くらいになるだろう。



編集後記

昨年、二度目の会報担当になったときは大変なことになったと思った。ブータンから入国許可の内示があったからである。ずいぶんお断わりしたが、引き受ける破目になってしまった。

そして九月から編集代表の山崎さんに全てを押しつけて逃げ出してしまった。まあ山登りの会だから山登りに出掛けるのは勘弁してもらえらるだろうと私なりの理屈をつけて……

いま、校正を終えて編集後記を書いているが、既に来月号の割付けを殆んど終えている。四月理事評議員会と若干の会務報告を残すだけである。

結局、この一年間に半分サボったことになる。本当に申し訳ないと思う。でも活字をにらんでいるより、思う存分山を歩いてみたいものだ。

幸い五月号が出れば私は用なしというところだ。

ところで、「山」の編集という仕事について考えた。仕事の分量としては大したことではない。一カ月に十時間も働けば「山」は出る。しかし、い

ちばん困ることはチョイチョイ山岳会のルームに出て来なければならぬことだ。夜だけで済むことではない。編集委員と連絡をとらなければならぬ。そんなことで思わぬ出費が重なる。だから「山」を編集する人は東京の人に

限るようだ。できれば会社の電話をタダでかけられる人なら一層都合がよいだろう。

私はイヤイヤ編集をやって来た。これでは立派なものができるわけがない。こういう面倒な仕事の好きな人がやるべきだろう。それと文句をいわれなくても笑ってられる人も条件のひとつだ。夜中に文句の電話をきくのはやりきれないものだ。

(小方)

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号〜250号) 金600円也
送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2〜15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1〜15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

昭和四十三年度

「山」編集委員

編集代表 山崎 安治
委員 吉崎 一郎
坂本 矩一
松田 雄一
倉知 全弘
小方 敬
担当理事

昭和四十四年四月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三十三 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治
頒価五十円 (293) 七四四一

東京都港区赤坂一丁目三番六号
振替口座東京四八二九番
印刷所 株式会社 技報堂